

コーヒーブレイク
COFFEE BREAK < Child Behavior Reflect Act of Adult >



東京工業大学教授 (社会学)

橋本大三郎

子供の問題とは 親の問題に他ならない。

ねません。

——今の学校のクラスの在り方について。

何もクラスを「村」にしてしまうことではないのです。いじめ対策として実現可能なのは、学校の選択制とクラスを選択制です。いろいろと問題が起り始める小学校3年生頃からは、クラス担任制をやめて教科担任制にすればいいと思います。各教科の先生が教室を持ち（ゾーンディフェンス）、子ども達がそこへ移動して授業を受ければいいでしょう。先生の負担軽減になりますし、子ども達にとっても、いつも一緒にいる子が違うことで、自分がそのクラスにいることに対して理由を持つことができます。

また、選択科目を増やすべきでしょう。面白い授業をアラカルトに選択できるような工夫をすればいいと思います。教科担任制なら、先生に少し余裕ができますから、そういったオプションの授業ができます。例えばカメラの上手な先生は、カメラを教えればいいのです。

——個性や創造性の育成については。

個性や創造性を育成したいのなら、まずはじめに最低限の規律を守らせる。そして、暗記の勉強をさせることです。これらは一見、逆の効果を生みそうですが、まずは個人差や学力差以前の最低限の基礎部分を身に付けた後で、そこから先は各個人の自由であるということが分かるのです。自由は、制限がないと実感できません。その自由の中でこそ、個性や創造性が存分に発揮できます。

勉強について言えば、今は指導要領が細かすぎたのではないのでしょうか。1年間のうち4ヵ月ぐらいでマスターできてしまう事柄を最低履修条件にし、残りの時間は、子どもがめいめいの個性に応じて自ら課題を見つけ、学習するようにすればいいでしょう。みんなが違うことをしていますから、誰かとの比較ではなく、嫉妬という問題が起りにくくなります。ただし、一人ひとりの達成度については、きちんとチェックしなくてはなりません。

仲良く」と学校からは言われます。これではいじめを受ける子にとって逃げ場がありません。いじめによる自殺とは、こういうロジックになっているのではないのでしょうか。

——対策についてはいかがですか。

学区制を緩め、自由に学校を選択できるようにすることです。最近、いじめがひどい場合、転校できるようになりましたが、転校すると「あの子はいじめられたな」と一目瞭然なので逆に社会的制裁になってしまい、これでは意味がありません。学区制を変えれば、転校も簡単にでき、誰も不自然に思いません。

それから、大検みたいな高検とか、中学卒業検定試験みたいな制度があれば、たとえ不登校の生徒であっても中学の学力があることを証明できるので、高校に進むことができます。

また最近、中高一貫教育が話題になっていますが、いじめ問題の観点からはあまり賛成できません。中高一貫の結果として、いじめが高校3年まで続くことになりそうです。今は高校を辞めることはできますが、義務化すればいじめに遭っても辞められなくなるので、いじめによる自殺年齢を引き上げることもなりか

——中学生のいじめや自殺の原因をどうお考えですか。

いじめが起る原因は、学校教育の在り方にも問題があると思います。昔のヨーロッパだったら、貴族の子どもしか勉強しませんでしたし、彼らは人数が少なかったので家庭教師による教育を受けていました。ですから、いじめようにも同級生がいません。ところが学校のように子どもが大勢いる場合は、何か不満を持っている子どもにとって、身近にいる誰かをいじめることによってそれを発散するきっかけとなります。

また、自殺をしてしまうのは、学校を休めないという社会の通念があるからではないのでしょうか。いじめられた場合、どうしても勉強をしたいので歯を喰いしばって学校に行こうと思うか、それともこんないじめっ子がいるのなら学校を辞めてしまおうと思うか、二つに一つで、自殺をする必要などありません。

いじめによる自殺が多いのは中学生まででしょう。それは義務教育なので、学校を辞められないからです。親も子どもに中学校くらいは卒業してほしいと期待し、プレッシャーを与えます。また、いじめっ子とケンカができればいいのですが、「ケンカはしてはいけない、みんな

——高校生についてはいかがですか。

高校生の中でも、女子高生に関心が集中しているように見えるのは、やはり日本の社会で、まだ男女に対する期待が違うことのあらわれです。

男性には、勉強しろとか大学に行けといった期待と圧力があります。男性は普通それに応えようと思うので、青年期のかなりの時間とエネルギーが受験に使われます。女性には、そういった期待や圧力が少ない。

これは親の態度に原因があります。女の子は可愛ければいいとか、気立てさえよければいいといったことを考えている親がまだたくさんいるのです。子どもは自分がどうあるべきかを自分自身で見つけるまでは、他人にどう思われるかを基準にせざるを得ません。ですから、このように親に期待された子どもは社会生活で、具体的に何をしたいのかかわりません。可愛くなくてはいけなくて、過剰なダイエットで拒食症になってしまったり、綺麗に見せる小道具としてのブランド品目当ての行動に走ったりするのです。つまり、彼女達の問題は、めぐりめぐって親の問題なのです。

——大学生についてはいかがでしょう。

大学に進学するのに、理由があることが大切です。大学とは全てを主体的に学ぶ場所ですから、主体的に学ぶ意志がなければ大学にいる意味がなくなります。まわりも行くのだから、親が行けと言うのだから、この辺の偏差値ならちょうどいいからとかいった理由で大学に来るなら、目標を見失うのは当然です。

ではなぜ、主体的意志がないにもかかわらず、大学へ進もうとするのでしょうか。それは、日本人が、高校と大学は連続していると錯覚していて、大学の「高校化」が起きているからです。

本来、大学は高校教育までとは切り離して考えた方がいいのです。高校までは普通教育が主ですから、みんなと同じことをしていればいいのですが、大学は専門教育ですから、みんなと同じことをしているわけにはいきません。ここが根本的に違うのです。大学とは、将来の職業

に役に立つための専門的力量を、自分の適性を考えつつ身につける場です。ですから、高校から大学へのモラルの切り替えが必要なのです。

それには、高校卒業から大学入学まで時間をおくのも一案です。もちろん、高校を卒業してすぐに大学に入っても構わないと思います。ただ、高校を卒業して一度就職してからとか、一度大学を卒業したが新たに専門を変えてとか、退職したのもう一度勉強しようと思ってとか、いろいろな年代、いろいろな境遇、いろいろな国の人々が来るというのが大学のあるべき姿だと思います。

——大学を改善するためには。

入学試験を改めることです。今の入学試験は、その大学にいることの意義と取り違えられています。偏差値がいくつで、このレベルの問題ができればこの大学にいられる、いて当然と思う、それがおかしいのです。大学は今までのような入学試験をなくして、どんどん学生を入学させてしまえばいいのです。その代わり卒業するには、もっと厳しい条件にすべきですね。

ただし、教育や研究のレベルを下げるわけにはいかないので、代わりにアメリカのTOEFL等のような入学資格試験という制度を設けます。この試験は、今の日本の入試のように各大学が恣意的に課すものとは異なり、全ての大学の共通試験であるため、一つ受けておけば、どの大学の資格にも使えるのです。この制度を導入すれば、大学側の入試に対するコストもかからないし、学生も1回受ければいいので、安く済みます。

今の入試は、大学ごとに別々で、高校の内容をはるかに超えた問題を出すため、高校の授業に対する評価にはなっていない。むしろ予備校の授業に対する評価になってしまっている。ところが、入学資格試験は、あくまで高校で学ぶべき内容に対する試験であるため、試験の点数が高校の先生自身の教育に対する評価となり、授業にも熱心になり、高校の活性化にもつながります。

アメリカのようなキックアウトの制度

もよいかもしれません。入学させた学生を4月から7月まで大学で勉強させてみて、成績の悪かった者をキックアウト、つまり放り出すというシステムです。大学での授業は必死にやらねばならないが、入学は簡単。こういったシステムになれば、それだけで入学試験はなくなり、さらに高校の教育から中学の教育までがガラッと変わるでしょう。

——今後の大学の課題は。

今の大学は個性を失っているように感じます。それは、大学側が学生を選択するシステムであるため、個性的である必要がないからです。このシステムを支えているのが偏差値制度です。学生は行きたい大学に合格できなくても、次善の策でその下のランクの大学に行ければいいと考える風潮にあります。こうした順送りのシステムによって、どんな大学にも必ず学生が来てくれます。大学にとってこんなに都合のいいシステムはありませんが、社会的にこれほど愚かなシステムもありません。

大学が個性的であるためには、学生が逆に大学を自由に選択するシステムでなければなりません。そのためには偏差値をなくし、入学試験をなくすことです。それにより、学生側から選ばれなかった大学は潰れます。潰れなくなければ、教育・研究のパフォーマンスを上げ、他の大学と差をつけなくてはならず、結果として個性化になるのです。

少子化の時代を迎え、今後、大学は淘汰の時代に入ります。さらに、もし日本の大学と外国の大学が同じ設置基準になれば、日本の大学は直ちに世界中の大学と対等の競争関係に入ります。外国の大学がもっと日本に進出するようになれば、日本の大学もその存亡をかけ、真剣に改革に取り組むのではないのでしょうか。

はしづめ・だいさぶろう
昭和47年東京大学文学部社会学科卒業。52年同大学大学院社会学研究科博士課程修了。在学中から構造主義を踏まえた「言語派社会学」の樹立を目指して執筆を続け、性、言語、権力を三つの説明原理とする「記号空間論」構想を展開。フリーで執筆活動を続けた後、平成元年東京工業大学助教授、のち現職。著書に「言語ゲームと社会学論」「仏教の言説戦略」「はじめの構造主義」「冒険としての社会科学」「橋本大三郎の社会学講義」「問？」など。

「社会に向けられた」人の質 現状がこうだから、まあいいやという ところで手を打ってきた

社会に対する視点を持つということも、そのための基本となる「思想をわれわれは持っている。なぜか。社会と真正面から切り結ぶような問題解決をしてこなかったからだ、と橋爪氏。思想は行動マニュアルだという。今こそ具体的な行動が求められる。

インタビュー／編集部

社会問題解決のために生まれた「文明」

— 少林寺で「人の質」といふとき、その人が、社会に目を向けているかどうかという点も重要な要素の一つになってきます。ところが、橋爪さんにいわせると「自分を活かす思想 社会を生きる思想」(怪書房、そもそも日本人は社会に対する視点というか、思想が昔から不得意である)と。それはどうしてなのか。まずそこから始めたいのですが。

生き物は、繁殖しなければなりませんから、どうしてもオスとメス、男女が出会わざるをえない。一匹では存在できないんですね。そうした制約はありますが、他の生き物を捕らえて食べている動物には、生涯の大部分を単独で生きるものもいる。一方、食べられる側の動物には、共同で生活しているものも多い。で、人間はというと、後者に属する。人間は、いつも他の人間といっしょにいるのが普通である。そして、これが社会なんです。

社会といふ群れといふのは、全体を指しましただけ、それはあくまでも一匹一匹、ひとりひとりが集まったものですよ。で、その一匹一匹、ひとりひとりが考えていることが、いつも一致するわけではない。利害の対立が生じる。そこで、さまざまな紛争、衝突が起こってくる……。これを解決するためのメカニズムを持っていないと、社会は存続できず、解体を余儀なくされる。

では、どんな解決のためのメカニズムがあるか。

個人対個人の場合だったら、殴り合い、喧嘩かもしれない。その結果、強いほうが弱いほうを従える。あるいは、自分のほうが強いと証明された段階で、より多くの分け前を取るといふ約束が成立して、弱いほうが我慢する。そんな解決方法もある。

もう一つは、グループを作って対抗し合う。たとえば家族。家族であれば無条件にメンバーを庇い、別の家族と対抗するわけです。

もつと大きな単位になると親族同士の対立という構図もある。もつとも、グループが大きくなればなるほど、その中での矛盾や対立も生じ、新たな対立を抱えてしまうということも考えられる。

そこで、さまざまに分化した問題を解決する方法として「文明」が生まれてくるわけです。たとえば、村や町をつくる。宗教をつくり、教会をつくる。あるいは王様を決めて法律をつくる。

逆にいえば、これらは社会の内部の問題を解決しようという動機からできている、とも考えられるわけですね。ただ、こうしたさまざまなメカニズムができて、それはまた新たな問題を生むことになって、まさに止まることのないイタチごっこなんですけれど。

— それは尽きないでしょうね。もしそれがすべて解決していれば、とくに世界は平和になっていくでしょうから……。

橋爪 そうでしょうね。でも、そういう社会のさまざまな問題を考へてきた歴史があり、またさまざまな社会についての経験を積んだ人たちが、ベテランの人たちがいたんです。文明国と呼ばれる国の歴史に名を残した人たちは、大概そうなんです。

日本では社会に対する知恵、思想が蓄積されなかった

— でも、日本はそうではないと?

橋爪 はい。日本の場合、一応文明国の端くれということになっていますが、さまざまな社会問題を処理する技法を積み重ねて

いない。あくまでも相対的に言っている話ですけれど。

— それは、どういうところから導き出されるのですか。

橋爪 この世で最も深刻な対立とは何かと考へてみると、民族問題が浮かび上がってくる。これは古来よりあった。

民族というものは、見るからに違う人たちが言葉が違う、髪の毛や目の色が違う、肌の色が違う、体格が違う、文化が違う。で、うまくつきあっているときはいいですけど、うまくいかないとなると真つ先にやっつけようという存在になる。そうすると、ジェノサイド(民族皆殺し)が起きる。そうしたことが、文明国と呼ばれるところでは、たびたび起きていたわけですね。

たとえば中国。春秋戦国ころを見ると、言葉が通じない、髪の色が違う、風俗習慣が違う……お互いにまったく異なる人間だということに認識していた。そして、そこでは、一歩まちがえるとジェノサイドに近いことが起きていた。

●社会学者

はしづめだいざぶろう
橋爪大三郎氏



一九四八年、神奈川県生まれ。東京大学大学院社会学研究科博士課程修了。現在東京工業大学教授。「健健」激動中国のスーパースター(岩波書店)「社会がわかる本」(講談社)「自分を活かす思想 社会を生きる思想」(怪書房)など、その著書はさまざまな分野にわたる。

そこまで深刻な社会問題を目にする、みんななんとかしなきゃいけないと考えるわけです。人間、こんなに争い、殺し合っただけいいのとか……。そこで、諸子百家とか、いろいろな古代なりの思想が出てくる。また宗教も生まれてくる。

でも、それが日本にはなかった。それは、明らかに様子が違う民族があまりいなかったというところもあるんですが……。アイ



ヌとか沖縄の人とか、見たところどこか違うなという人たちはいても、境界が曖昧で、混血をしていくという方法でジェノサイドには至らなかった。

——そのために思想も宗教も日本では生まれてこなかったということですか？

橋爪 そのままの必要がなかったというのとですね。たとえば、家族だけだったら、そんなものも必要ない。家族を超えた天下国家を考えるから、思想や宗教が必要になってくるわけですから。

ただ、そうはいつでも日本でもまったく紛争がなかったわけではありません。たとえば、豪族同士の争いというのがあった。これは彼らの系統や文化の違いによって生じた戦いですね。でも、民族の違いによる紛争かどうかは明らかではない。

いずれにしても、日本の場合、相手を徹底的に排斥するところまでいかなかった。『日本書紀』や『古事記』にもあるとおり、出雲と大和の神様は親戚になる。ナアナアで手を打って採め事を解決する。そして、いつの

間にか一体感のある社会をつくり出す。平安時代になるとまさにそうですね。豪族や貴族が天皇を頂点として秩序づけられていく。

次に起こってくる争いは「土地争い」。平安時代以降、開墾が活発になりました。それまでは、自然に人が集まり、川沿いの湿地帯に棚田を作っていた。それを今度は、新田を大規模に開墾する。江戸時代半ばまで新田開発が続きます。

そうすると手間暇かけてますから、そこは自分の土地だという意識が強烈に生まれてくる。そんな土地に税金をかけるぞといわれれば、いや、そんなもの払いたくないとなる。で、土地争いはどう決着したかというところ、最初は貴族に頼んで税金をまけてもらおうという運動だったんです。でも、貴族が頼りにならなくなってきた。そこで、次に力を持ったのが荘園のガードマン、つまり「武士」ですね。武士が実質的に農地を支配していましたから、今度は武士に税金の問題を解決してもらおうと。

で、鎌倉幕府になると、貴族と武士の二元的体制になる。そして、室町時代には、

武士がどんどん土地を吸収していき、戦国時代になると、貴族はもうどこかへ行ってしまうって、完全な武家政権になる。

ところが、こうした経過をよく見ると、合法的に進んでいないのです。法律上は、貴族の土地だったはずであり、その土地も貴族が天皇の土地をネコババしたものだから、もともとは天皇の土地ということになる。だから、出るどころへ出れば、どうもすみませんでしたと謝るしかない。

江戸の末期も、武士の土地所有や政権の法的根拠がなかったからこそ、尊皇攘夷思想(六八ページ「用語解説」参照)が可能になったわけです。もし、幕府が天皇制を廃止して、武家共和国でもつくって、法律制度をきちんと整え、法律上の革命を完成させていたのなら、尊皇攘夷思想なんか起きて、切り捨ててしまえば終わりだった。でも、そうならなかったのは、佐幕思想が勤皇の前に論理的に一貫できなかったからな

んですね。

国を運営するのに、法秩序によって権力者の正統性を証明しなくてもいいし、土地の所有関係を明確にしなくてもいい。本来なら、血を流し、骨が軋むような思いをして正統性を証明しなければいけないところを、根拠が曖昧だけど、現状がこうだから、まあいいや、というところで手を打ってきた。そうなるって、社会に対する知恵、思想なんてものは蓄積されないんですよ。

戦後は身を縮めた小さな自我

——でも、少なくとも明治以降は近代国家の体裁を整えるわけですよ。

橋爪 それはそうなんです。けれどそれは、とってつけたものなんです。

たとえば、法律一つとっても、民法に關していえば、それにはこんなエピソードがある。

明治政府がフランスからボアソナードという人呼んできて、民法を作ってくださいと頼んだ。でも、ボアソナードはその依

頼を聞いてびっくりするんです。私は日本社会について何の知識もありません。法律を作るには、その社会についての知識、習慣を理解していないとできないと。ところが、明治政府がいうには、あなたはナポレオン法典にたいへん詳しい。だから、それを翻訳してくれればいいと(笑)。

——デタラメな話ですね(笑)。

橋爪 そう。そんなふうに日本の民法ができたんです。

だからこそ、日本では法律どおりにすると人々の常識に反する。

法律を盾に、たとえば大家が店子(たなこ)を立ち退かせようとすると、なんて人情を理解できない奴だと目の敵にされる。また弁護士は三百代言のペテン師なんていわれて嫌われた。

そんなこんなで、とにかく近所の人と仲よくして、人格者と呼ばれ、家族からも近隣からも尊敬されて生きていく、これが日本では安全な生き方だと……。——それが、未だ続いているということ

すね。

橋爪 そうです。ただそうすると、日本人特殊性論になってしまふ。私はあまりそう考えたくない。科学的に何か根拠があつて、日本人はそういう考え方しかできないというのではないと思うのです。社会と取り組む思想は、歴史の蓄積、習慣としてできてくるわけだから、きちんと手順を踏めば、日本人も別のスタイルの行動様式ができるはずだ。ヨーロッパを考えても、キリスト教への改宗や宗教改革が行われる前は、ごく原始的な部族社会でしかなかったわけですからね。

——本の中で竹田青嗣さんは、日本人は一貫して金儲けという「エロスゲーム」に没頭している。要するに自分のことだけしか考えていないといわれていましたよね。

橋爪 日本は第二次世界大戦を経験していますが、戦前、戦後と分ければ、それは戦後という時代の特徴な状態ですね。少なくとも、戦前にはそんなことはなかった。

戦前は、明治以来の富国強兵策をとって



いた。国権、国家を強めなければ、日本民族は生き残ることができない。そういうことを強く意識していた時代でした。つまり、自分の経済的利益より、まず国家。自分がなくなっても、国家はある。自分の思いどおりにならなくても、国家はある。そういうものに忠誠を誓うという考え方は、江戸時代にはなかった。そういうたいへんな人格改造が、きわめて短期間のうちに行われた時代でした。それは、天皇というシンボルを持ち出したことによる功績が大ですね。で、これは半ば成功し半ば失敗した。自分の利害、損得を置いて、兵隊に行こう。税金を払おう。そういうふうに分をコントロールする術を学んだ。これはプラス面です。マイナス面は、ほんとうに社会公共性を認識して、自分の自我と社会公共性のバランスを確立したわけではなく、あくまでも天皇との関係において理解しただけだった。そうすると、天皇が人々の期待を裏切ったとき、自我も崩壊してしまふ。まさに戦後はそれが起こったと思うんです。

戦後は、国家と自分は関係ない。国家が実体として存在するなら、それは自分にとって迷惑なことだ。国家は必ず悪だ、という発想が蔓延しました。国家と関係ないこと、国家に反対することを自分の存在証明にしようということになってしまった。それが公共性の意味であり、そして市民というもののだと。

戦前の国家が無理やり背伸びをした大きな自我だったとすれば、戦後の自我は無理やり身を縮めた小さな自我になってしまったということですね。

で、どういうふうな身を縮めたかという、経済のことはやっていいが、他のことをやらないことにしよう。文化はどうせ二流、三流だ。政治、軍事、外交のことはやらない、考えない、そういうふうに分を限定してしまった。そういうことは、他の人が考えればいいと。具体的にいえば、アメリカが代わって考えてくれたからこそ、これまでやってこられた。

——それが、戦後ということですね。

橋爪 そうです。でも、もう限界に来ている。アメリカも日本と二人三脚で進んでいくことにメリットを感じなくなっています。ソ連も崩壊し、これからは中国と仲よくするほうが利益は大きいですから。

——なんか、絶望的な気もしますけど、それでもあえて、社会に目を向けようと橋爪さんはいわれていますよね。

橋爪 いや、絶望的だからこそ、そうしたものが必要なんです。

で、どのように考えたらいいかということ、まず自分の感覚、感性みたいなものはいったんカッコに入れる。そして、自分も含めて人々がどうして今述べたみたいに考えるのかということ、外から考えていく。そういうことが、今いちばん必要ではないかと。そうじゃないと、思想というもののみならず、私小説になってしまう。

自分は「フロ、メシ」といいながら、男女同権を説く本を読むと、そのとおりと思う。それはおかしいでしょ。

思想というのは、行動マニュアルだと思えばいいんです。何か困ったときに、いろいろな条件を考え、それに十分対応する答えを出し、行動しましょうと書かれているのが、思想なんだと。

まあ、暇なときにたくさんそうした本を読んでおいて、あつ、そのとおりだなと思えば、そう行動すればいいんです。そして、よりよい行動をするためには、たくさん思想があつていい。その中から選択すればいいんです。

マルクスやルソーは、社会を具体的に解析しようとした科学者であり、そして社会をこういうふうな運営すべきであるという設計図を書いた人です。でも、それが現実にならなかつたら、それはゼロ。どうしようもないものとして扱われる。ヨーロッパの正統思想は、皆そういうものなんです。床の間に飾って精神訓話としてありがたがるものではない。思想とは、人生を生きる知恵、よりよく生きるための方法論なんです。

——ところで、今一番に考えなくてはいけないことは何ですか。

橋爪 一番かどうかはわかりませんが、私は歴史の問題を重視します。戦後、憲法が変わり民主国家になった。戦前と違った国になった。違った国になったらどうなるか。それまでのことはすべて済んだこと、だから何の責任もない……。そんなとんでもない発想を、もう一回考え直してみる必要があるのではないのでしょうか。

(一九九七年五月七日、東京工業大学にて)

はじめに

岩波新書の創刊は一九三八年一月。以来六〇年、赤版から青版・黄版・新赤版と装丁をかえつつ、刊行点数は二〇〇〇点を越えるにいたりました。

わたしたちはいま、さらに時代の要請に応える多彩な出版活動を展開するためにこそ、あらためて岩波新書の六〇年を捉え直したいと考えております。その一環として、各界でご活躍の方々に、左記の趣旨でアンケートをお願いしました。

岩波新書「私の薦めるこの一冊」をお教えください。その際、どのようなことからのご推薦かをお教えください。(A)生き方を考えるうえで示唆に富む、(B)情報として役に立つ、(C)楽しく豊かな時間を過ごせる、(D)その他。そして、ご推薦の理由、それにまつわる思い出などをお教えください。

その結果、四二九人の方々からご回答をいただくことができました(なお、推薦理由の分類について無記入のものはすべて「—」としました)。ここにお届けする『図書』臨時増刊号は、寄せられた全回答を筆者の五〇音順に配列・編集したものです。

ご推薦いただいた書目には、残念ながら現在品切れとなっているものもあります。このアンケートをもとに来年二月、六〇年を記念して、二〇点を復刊いたします(該当書目には巻末索引に●印を付しました)。

回答をお寄せいただいた方々のご協力に、篤くお礼を申し上げますとともに、本号が読者の皆さまに恰好の読書案内として役立つことを願っております。

一九九七年一月

岩波新書編集部

橋爪大三郎 (東京工業大学/社会学)
栽培植物と農耕の起源 中尾佐助

(B) 社会と国家と権力の起源について考えていた文学部社会学科の学生のころ、書名にひかれて求めた一冊。農業の基礎には、人間と自然の間の気の遠くなるような相互作用の蓄積——栽培植物——の存在が欠かせないことをのべている。野生種↪栽培種の差分を、人間の社会的行為の産物と考える視点は、私の転換点の一つとなった。

『新聞研究』 第556号 pp.24 日本新聞協会 1997.11.1発行

橋爪 大三郎

(東京工業大学教授 49)

Q1新聞の読み方

購読している一紙の、朝刊を毎朝、夕刊を夕方、ざっと読む。あまり時間はかけない。テレビはCNNを長時間、ながら視聴する。雑誌は仕事で月一回まとめて読む。集中度は新聞の場合、低いかもしれない。

Q2新聞に裏切られた事

残念ながら、新聞はあまり信頼できる存在ではない。言論のモラル(事実と意見への徹底)は、こればかりが感じられない。

Q3分かってないと思つた事

読者を一段低くみて、これぐらいの見出しをつけておけば、これぐらいの記事を書いておけば、ちょうどいいであろうというおごりが行間に見えるとき。

Q4新聞は大事か

新聞は、ありあまる情報のなかから知るに値する情報を選びだし、共有する点(編集機能)に意味がある。どのようなかたちであれ、この機能は必要だろう。

Q5多メディア時代、新聞は

リアルタイムの情報提供(速報性)という点で、新聞は新しい通信メディアにかなわないであろう。しかし、それを、毎日単位のコンパクトな画面上に編集しているという点に、新聞の意義がある。

印刷形式でなくなっても(壁掛けテレビで受信する形になっても)、新聞的な媒体は相変わらず重要であろう。

(はしつめ・だいさぶろう)

新聞協会研究所が実施した「第十二回新聞信頼度調査」では、新聞に対する信頼度を表す数字が過去最低レベルとなったことが、明らかにされた。このような折、本誌では、新聞と読者、新聞と社会の関係をあらためて考えるべく、各界各層の人々を対象に、アンケートを実施した。質問状は編集部が選んだ十八人に送付、三十五人から回答を得た。設問は以下の五つである。

Q1 あなたは普段、新聞を、いつ、どのように、どのくらいの時間読みますか。テレビや雑誌に比べて、どうでしょうか。Q2 あなたは、読者として、または、取材を受けた者として、新聞に寄せていた信頼が裏切られた、とお感じになったことがありますか。あるとすれば、それはどんなことですか。Q3 「新聞は分かっている」とお感じになったことがありますか。あるとすれば、それはどんなことですか。Q4 あなたにとって新聞は大事なことですか。また、社会にとって新聞は大事なことだと思いますか。なぜそのように思われますか。Q5 インターネットや衛星放送など、様々な新しい情報源媒体が出現しています。今後、ますます、暮らしの中に入ってくるでしょう。それでもあなたは新聞を読みますか。そんな時代、新聞には何を期待しますか。

回答は、個人の資格で書いていただいた。必ずしも職業上のコメントではない。しかし、便宜的に、回答者を市民・住民等、表現者、学者・編纂者、政・官・経済界の四グループに一応くくったうえで、五十音順に掲載した(敬称略)。

回答していただいた各位に厚く御礼申し上げます。(編集部)

「新聞」に関する 各界アンケート

新聞と読者の間は今

旬ひと

週間日録

大三郎

香港返還と、中国の積極外交への転換。そして、各地を席捲する通貨不安と金融危機の嵐。いま、アジアが激動している。そんな折、日米安保条約の新ガイドライン論争が政権与党の火種ともなっている。広範な社会動態への鋭い分析で知られる理論社会学の第一人者・橋爪大三郎氏に、これからの日本の「針路」を聞いた!

「日米安保条約がダルマさんだとしたら、ガイドラインというのはその目玉なんです。ダルマに魂を入れたわけです。日米安保条約だけあっても役には立たない。実際に日本はどう動くかの分担がないんですから。ガイドラインを作っ



最強国が最強の軍備を維持する事が戦争を防ぐ方法だ!

11月17日・月曜
昼食を摂りながら、教育問題についての定例研究会。日本を悩ませる重い課題だ。「絶対に戦争を防ぐという方

て初めて、米軍と自衛隊が仮想敵国を相手にどう協力しているかが決まってくるわけなんです。ところで、戦争を絶対に起こさないことはできるのか? 戦争は相手があったら防ごうとしても相手はその気なら起きるものです」

法は今のところありません。戦争なんてなければいいと誰もが思っているが、それはかなわぬ夢。では、どうすれば戦争を少なくできるのか。ま

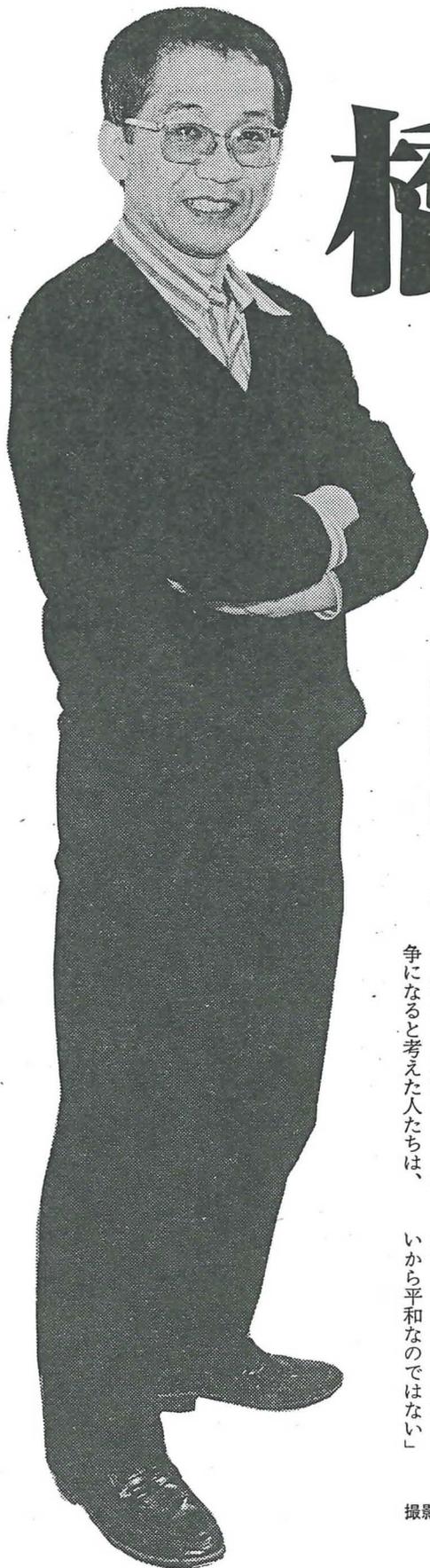
ず、自分が戦争をしようと思わないこと。次に相手に戦争を起こす意欲や能力を与えないことです。どんな国が戦争を起こすかという点、独裁的な国家や高度な軍備力、工業力を持った国。たとえば、ナチスとか昔の日本とか。普通、高度な工業力が発展していくと民主主義国家になっていく。そうなるまで国民の声を聞かなくてはならないので、犠牲を国民に強い戦争は起きにくくなる。第1次大戦後、みんな反省して戦争を起こさない枠組みを作ろうとしたんです。それでも起きてしまったのは、ナチスのような民主主義の鬼つ子と共産主義のソ連が登場したからであって、普通の民主主義国ばかりなら戦争は起きないとアメリカは考えた。ソ連の戦争への意欲と能力をなくせば戦争は起こらないという考えが冷戦構造です。意欲も能力もなくなると、ソ連は解体したでしょ。そして今度は中国。中国には戦争意欲も能力もあるかもしれないので、要注意になった。相手の意欲をそぐために、戦争すれば必ず負けると思わせ

負けた。すると、今度は戦争といえは太平洋戦争のことになり、『軍隊があるから戦争する。戦争をすれば負ける。軍隊がなければいい』という発想になったんです。平和を守るために国を守る自衛力はなければいけない。しかし、自分たちが侵略者だった時代の反省から、軍隊があると戦争になると考えた人たちは、

パーソナルデータ
はじめ、だいさぶろう。
本名同じ。社会学者。48年10月21日、神奈川県生まれ。東京大学教養学部文科Ⅲ類に入学後、社会学科に進み、構造主義と出会う。72年、同大学大学院社会学研究科博士課程を修了する。89年3月、公募で東京工業大学助教授に就任し、現在同大学教授。性・言語・権力を原理とした社会学を構想して研究活動を行う。オウム問題などで論壇でも活躍。著書に、『はじめての構造主義』(講談社現代新書)、『橋爪大三郎の社会学講義1・2』(夏目書房)、小林よしのり氏、竹田青嗣氏との共著『正義戦争・国家論』(徑書房)など多数。中国問題にも精通している。血液型・A型。

る。これが戦争を防ぐいちばん有効な方法であり、世界最大の強国の義務です。最強国が最強の軍備を持っていないければ、世界のバランスは崩れて戦争の一手前までいってしまう。そこでアメリカは国力が優位である限り、なんとしても最大優位の軍備力を維持する必要があります」
11月18日・火曜
北京の清華大学から、旧知の胡副学長が来学。東工大の

橋爪



社会理工学研究科・価値システム専攻を案内する。「今の日本人の戦争に対する意識は、『美に懲りて膺を吹く』という感じだと思う。一度痛い目に遭うと次のときに過剰反応を起こす。日本は前の戦争でひどい目に遭ったと考えている。その戦争がなぜ

起きたかという点、日清・日露戦争で大勝利をしたからです。国民は、戦争とは勝つもの、勝てば景気もよくなり、就職先も増えるし領土も増える、いいことばかりだと考えたわけ。そこまで簡単じゃないけど、戦争アレギーはあまりなかったんですね。そこで調子に乗って戦争したら大

負けした。すると、今度は戦争といえは太平洋戦争のことになり、『軍隊があるから戦争する。戦争をすれば負ける。軍隊がなければいい』という発想になったんです。平和を守るために国を守る自衛力はなければいけない。しかし、自分たちが侵略者だった時代の反省から、軍隊があると戦争になると考えた人たちは、

自衛隊もないほうがいいと考える。いろいろ議論があってもそれは軍隊ではない。整理されていない妥協の産物に思えます。日本が50年間享受してきた平和は、実は軍事力の結果、もたらされたものなんです。軍事力があるから平和なのであって、軍事力がなければ平和なのではない」

撮影/越田省吾

日本が50年間享受した平和は軍事力がもたらしたものです

米安田火災

日本のドライバーは、 40年間で、 地球10周分を 運転するという。



日本のドライバーは、1年間で平均約1万キロ運転します。たとえば、20歳で免許を取って、60歳まで40年間運転すると、なんと地球10周分、そして、安田火災の「安心自動車保険」。車両保険つき、対人賠償無制限、対物賠償1,000万円以上の自家用自動車総合保険です。さあ、いつまでも一緒に走ってください。

安田火災の 安心自動車保険

〒160 東京都新宿区西新宿1-26-1
安田火災お客さまサービス室 TEL.03(3349)4404

ガイドラインは、 いざというときの 準備なんです



11月19日・水曜

大学院で社会学のゼミ。夕方から、目黒区の市民講座で人権についての話をする。

「日本の繁栄は大国と結びつくことにあります。日英同盟しかり、日米安保条約しかり。日英同盟は軍事同盟で、日英の軍隊がともに戦った。でも日米安保条約では、日本は何もしなくていい。経済だけやってほしいと言われた。そこで国民は甘やかされて、軍事的なことを一切考えなく

なってしまうんです。

日本は敗戦コンプレックスから抜け出していない。これは、放っておけば100年たってもなかならない。それをなくす唯一の方法は、アメリカの同盟国となって共通の敵と戦い、勝利して、自由と民主主義を守る友人であると認め合うことです。これができれば新しい段階に両国関係が変化したでしょう。しかし、戦争ができないから、日本は同盟国であるということアメリカに

示す機会がなかった。いつまでもたっても信用されない。日本のリーダーが信用されない、国民全体が自由と民主主義を正しく認識して敵と戦う決意を持っているかどうか怪しいと思われる。だからといって戦争しろと言っているわけではありません。戦争はないに越したことはない。でも、戦争があった場合にちゃんと行動ができるかどうか、これが大事なんです。準備がなければ、いざという場合に決して行動できない。ガイドラインはいざというときのための準備なんです」

11月20日・木曜

シドニー工科大学との交流協定について、大学で打ち合わせ。今日もまた会議。

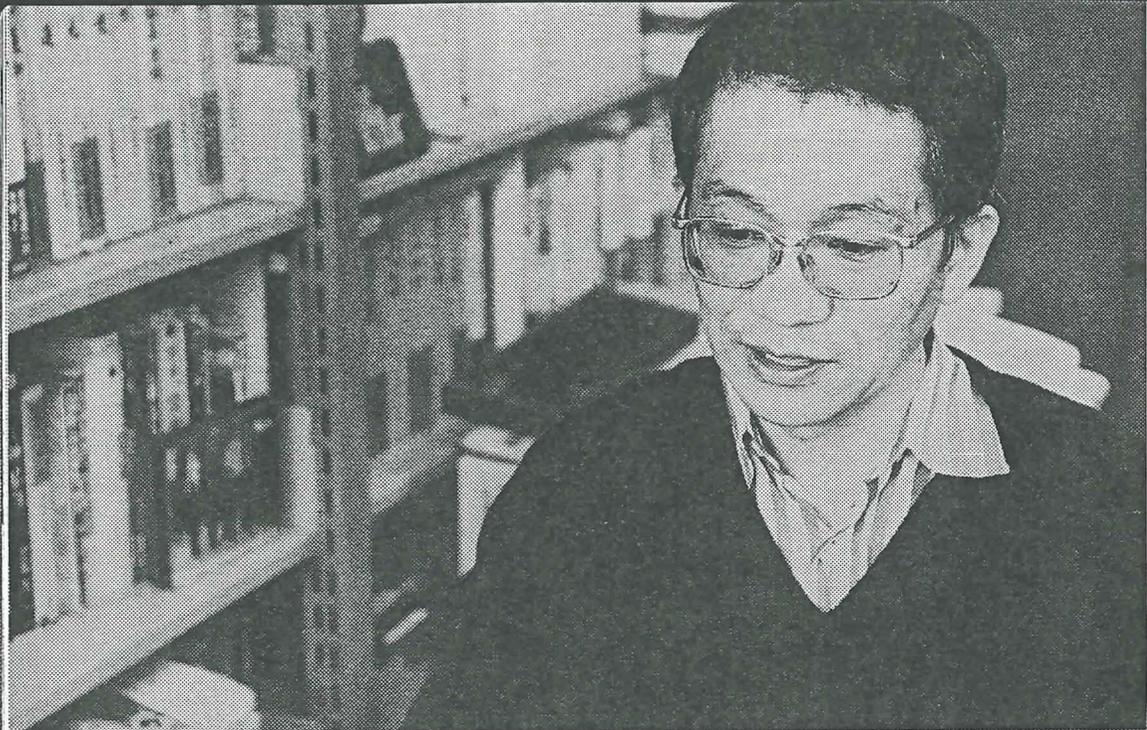
「高校のころ、大学で何を勉強しようかと決めかねていて高校の図書館でいろんな本のぞき、社会学という学問があることを知りました。パラパラ読んでみたら案外チョロくて(笑)、これならほかの学問と違って私にもできるかもしれないと思っただけです。大学に入ったら、そこで教えられる社会学は面白くも何となく、教科書なんかでは勉強しませんでした。マルクス主義が大はやりでしたから、マルクス主義の本を山ほど読んで、全共闘になったから、デモとか座り込みや泊まり込みなんかを全部やった。ストライキになり、大学には全然行かなくなった。授業が再開されても授業粉砕闘争と

いうのがあったので先生とこちゃこちゃして。結局、合計一年半ぐらひは大学で過ごし、残りは何もしてないんです。大学ではサークルに所属して演劇をやっていました。人数が少なかったたので役者も裏方もやりました。演劇は自分以外の人間になれるのが魅力で社会学にも役立つと思ったけれど、自分がほかの人間になれるわけでもない。私は演劇に向いていなかったんです。演技は、別の人物になることは違うということがよくわかりました。

3行情報

【日本ペーリಂಗーインゲルハイム(株)『98年度カレンダー』進呈!!】『ドイツの歴史街道』をテーマにしたカレンダーを、30名に、はがきに〒住所、氏名、年齢、性別、職業、電話番号を明記し、〒666-01兵庫県川西市川西北郵便局留 日本ペーリಂಗーインゲルハイム(株)『カレンダー-WH係』へ。12月12日消印有効

旬ひと



「毎年、必ず中国へ行く。今年の夏はウルムチまで行きました」



趣味がないので、 時間があれば仕事か 家事をしています

11月21日・金曜

大学院で言説編成の授業。夜は、インターネットで読売新聞の会議に参加。立岩真也氏が生命倫理と臓器移植を本格的に論じた『私的所有論』を書評する。

「安室さんについて面白く感じたことは、彼女が自分に似合う髪型にしていたら、アムラーというファンが生まれ、ある年齢層でそういうスタイルの集団ができていったこと。彼女自身はそういうつもりでやってたわけじゃないから髪を切った。そのあたりから、私は私の道を行くという意志的な感じになってきた。そこに今回の結婚。もともと彼女は彼女だった。アムラーが真似して20歳で結婚するのはとても思えない。より下の世代は、『いくらアムラーが頑張ってもアムロにはなれなかったね』って思って、アム

ラーになるのはやめようと思わず。冷めた目で自分に合うものは何だろうと考えるかもしれない。それは大変な進歩だと思う」

11月22日・土曜

部屋の片付け。急ぎの原稿数本を書き上げる。ワープロの前に座ると落ち着く。

「昔の日本のドラマは、そういうことがあればいいな、でも本当なら困るなあという後ろめたい願望の投影なんです。でも、最近はずっと自分とかけ離れた世界のことをのぞき見ているというより、自分の現状を追認している要素がある。実態は進んでいるけど、これでもいいかなと思うわけです。すると誰かがこれがいいと言ってくれたり、これがファッショんだ、ともてはやしてくれたりする。それで、何となくいいような気がして落ち着く。『失楽園』みたいなのが

容認されるようになってきました。私はテレビなどの性描写は過激になってはいかないという立場なんです。誰でも見られるものと、自分だけが他人に迷惑をかけないものとはメディアとして違う」

11月23日・日曜

明日、成田に到着する香港・台湾・北京の学者たちに確認の電話を入れる。静岡での国際会議が楽しみだ。

「私には趣味がないので、時間があれば仕事か家事をしています。家事は妻と分担でやりますが、料理は主に私がします。あえて得意料理をあげるなら中華料理かな、安いし(笑)。今、関心があることは歴史の問題ですね。『教科書が教えたかった歴史』とか『新しい教科書を作る会』とか、歴史論争の成り行きに注目しています。私は靖国神社問題の決着方法について考えています。靖国神社のことを考えるのって一部の人間だけのようには思えるけど、普通の国民にとっても大事なことです。憲法と靖国神社の存在は矛盾するけど、調和させないとうりしようもない」

■■■■■■ (次回は、タレント・渡辺美奈代さん)